Acanthus

（土浦一高・旧土浦中学とその周辺の物語）

第１８６号　2025（令和７）年２月18日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰhttp://www.sin-syu.jp/

進修同窓会 HP にアクセス

修学旅行　宮島（『星座 50 周年記念号』より）

1965［昭和 40］年度からの定時制修学旅行

1952［昭和 27］年度から始まった定時制の修学旅行は、昭和 30 年代には、４泊５日(車中１泊)の日程で行われてきましたが、東海道新幹線が開業すると、車中泊はなくなりました。

更に、山陽新幹線の開業に伴い、岡山・広島方面にまで足を延ばせるようになりました。

なお、引用文中の【　　】は筆者による注記です。

東海道新幹線開業

1964［昭和39］年、東京オリンピック開会直前の10月１日に、東海道新幹線東京＝新大阪間が開業したのに伴って、本校定時制の修学旅行も、1965年度からは車中泊をやめ、新幹線を利用した、伊勢・奈良各１泊、京都２泊となり、見学先も増えた上に、余裕のある日程となりました。

更に、1972［昭和47］年３月15日に、山陽新幹線新大阪＝岡山間が、1975年３月10日に、岡山＝博多間が開業すると、1972年度以降は、岡山・広島などの中国地方或いは四国も見学地に含まれるようになり、時期も９月下旬から10月に変わるなどし、加えて、生徒数の減少に伴い、２年に１度、３・４年生合同で実施されるようになりました。

1979【昭和54】年度の修学旅行

1979年度の修学旅行は、３・４年合同で、広島、更には小豆島にまで足を延ばしました。その旅行を、４年皆川玲子(定29回)の「四国・関西方面修学旅行記」(1980年２月発行『星座』所収)で辿っていきます。

旅行行程

10/29（月）＝鉄道　－バス　～船　…徒歩
＝1434 土浦 0713＝0823 上野＝東京 0912 ひかり67号…宮島～宮島口－広島「旅館たなだ」泊
10/30（火）旅館たなだ 0810－0840 比治山公園 0900－0920 平和公園・原爆資料館 1020－1040 広島駅 1118 ひかり138号＝新倉敷－大原美術館、考古館、民芸館 1430－後楽園 1600－岡山「山長旅館」泊
10/31（水）山長旅館 0830－0910 岡山港～土庄港(小豆島)－銚子渓－太陽の丘－寒霞渓－くじゃく園－1630「海南荘」泊
11/1（木）海南荘－土庄港 0800～岡山港－岡山駅 1036 ひかり128号＝1141 京都 1205－嵐山－竜安寺－金閣寺－銀閣寺－1700「ホテルはとや」泊
11/2（金）「ホテルはとや」－清水寺－京都駅 1129 ひかり４号＝1420 東京＝上野 1513＝1623 土浦

１日目は、

「……。朝が早かった為に新幹線の中ではほとんどが寝ていて話しをする人は数人のみでしたが、中には空腹感をいやす為にビュッフェで軽食をとる人もいた様です。そのようにしている間に、広島十四時三十四分着、広島駅よりバスにて宮島口まで足をのばす間に、『カキ』の養殖をしているのがバスの中から見えました。広島名産の一つに『カキ』の養殖がありますよ、とガイドさんに案内を受けながら、宮島口着十五時三十分、宮島口より船に乗り、約十分宮島着、四十分の間に厳島神社見学などを終え、一日目は広島市内の旅館『たなだ』一泊、夜は旅の疲れの為に早々に寝てしまった様です。……。」

と、従来のように在来線のみの利用ではとても不可能な日程で、厳島神社見学を終えています。

２日目午前中は、広島市内見学。９時20分に平和公園、原爆資料館着。ここで皆川は、

「……。私がこの旅行中一番心うたれた、そして一番思い出に残ったのが原爆資料館の中に入った時でした。この時初めて戦争という言葉の重大さを知りました。私達は戦争を知らずに今まで育ってきましたので、これほどまでに戦争が恐ろしいとは思ってもみませんでした。……。資料館の中には当時の写真、人が着用していてぼろぼろになった衣服や、当時原爆で溶かされた物などが残って置いてあります。それらを見ると戦争の恐ろしさを語っている様に見えました。……。」

と、戦争・原爆への恐怖を記しています。

広島11時18分発のひかり号に乗車すると、１時間弱で新倉敷に到着。バスで倉敷美観地区へ移動し、大原美術館、考古館、民芸館の見学後、自由行動。買い物を楽しんだ人もいたようです。その後、日本三名園の一つ岡山後楽園を見学し、宿の山長旅館に入りました。一日で広島、倉敷、岡山を見学出来るのは、新幹線のスピードの賜物です。

入浴、食事を済ませた後、21時まで自由行動。殆どがグループに分かれて、市内見学や買い物に出掛けました。全員が21時には戻りましたが、22時の消灯時刻が過ぎても、話は弾んでいました。

３日目は、岡山港からフェリーで１時間20分、のんびりとした船旅を楽しみました。

『二十四の瞳』の像の前で記念写真を撮り、バスで小豆島見学。銚子渓での昼食後、太陽の丘、寒霞渓、くじゃく園というコースを辿り、16時過ぎに、土庄の宿「海南荘」に到着。

入浴、食事の後、21時まで自由行動でしたが、疲れて寝ている人もいましたし、出掛けた人も21時には戻りました。さすがに疲れが溜まってきたのでしょうか、22時消灯後は、全員が寝息を立てていました。

修学旅行　小豆島「二十四の瞳」の像前（『星座 50 周年記念号』より）

４日目は、８時に土庄港からフェリーで岡山港に戻り、10時36分発のひかり128号に乗ると、12時前には京都駅に着きます。京都駅からバスで嵐山へ。嵐山で昼食を摂り、竜安寺、金閣寺、銀閣寺を見学し

た後、「ホテルはとや」に17時着。食事、入浴後の自由行動では、最後の日とあって、買い物や市内観光を楽しむ生徒たちで、部屋には誰も残ってはいませんでした。

最終日も、新幹線の効用で市内半日コースが可能になり、清水寺へ。記念写真を撮り、境内を見学した後、京都駅へ。11時29分発のひかり号に乗れば、14時20分東京着。山手線に乗り換え、常磐線上野発15時13分発の平行き客車列車を利用すると、16時23分には土浦に着きます。在来線で7～8時間も掛けて東上した以前の旅に比べると、便利で快適なものとなりました。

旅の想い出

修学旅行は、働きながら学ぶ定時制の生徒たちにとっては、忘れられない思い出になっています。皆川は、「四国・関西方面修学旅行記」の冒頭に、

「私達にとって定時制に入学した一つの理由は高校卒業の資格をとるという理由、もう一つは修学旅行の楽しみだと思います。働きながら学ぶ四年間は決して楽とは言えません、時には挫折感を覚える事もあります。仕事の為にやむを得ず休学する人などがいます。話題を変えますが、三、四年合同、四泊五日の修学旅行記といっては笑う人もいるかもしれないので、私の思い出記とでもいっておきましょう。私にとってはこれが最後の思い出になったからです。暖かい為かまだ紅葉には一歩たりなかったように思われましたが、とても楽しく五日間を有意義に暮らして来ました。……。」

と、述べています。

また、新幹線利用が始まった1965年度の修学旅行に参加した萬田久子(定15回)は、その楽しい思い出を、『星座』(1966年3月1日発行)「四年間の想い出」の中に、次のように記しています。

「……。私達四年生には関西旅行はすばらしい想い出だと思います。伊勢には伊勢の想い出が、奈良、京都、大阪、神戸と誰もが【それぞれの地での思い出を】味わったはずです。私にはいつまでも忘れられない事が二つあります。奈良の旅館で、私達はダンスをしました。班長だった私も夢中ですごしてしまいましたが、部屋に帰っておちつくと、皆んなして明日の京都は外出出来なくなってしまうのではないだろうかと、先生達怒っていらっしゃるかしら、おそくまで心配していました。先生の声が聞こえたので、私はねまきのまま先生に聞きにいきました。今でも忘れません。あの時の言葉を。『なかなか健康的で良かったよ』と言って下さったので、私達はほっとして、これはないしょですが食欲がでてきたので夜中にぽりぽり始めてしまいました。

もう一ツは最後京の夜わずか一時間四十分の外出時間でしたが、明日は自宅ですごせるうれしさと、もっといたいと思う寂しさがまじって何もしないで歩きました。京の夜を歩いていても、ただ来てよかった、団体生活もわるくないもんだ。班長とは名ばかりで、何も出来なかった、と反省しながらも、京の夜は苦しかったことも、悲しかったことも、いま私の生活には大いにプラスされて、最後の学生生活にはふさわしい想い出であります。自分が定時制の生徒としてすごした四年間は、私の生活にプラスされるでしょう。修学旅行の思い出のアルバムに貼られた一葉一葉、写真の様に、各班のかくし芸大会、田中君のなにわぶし【浪花節。江戸時代末期、大坂(大阪)に起こった、三味線を伴奏とする大衆的な語り物。浪曲】、鈴木君達の踊り、小出さんの歌、非常にバラエティにとんで皆んなを笑わせました。私達の班はリズム・パレード、今流行のダンスをみんなで踊って、理解ある先生達は一等にして下さいました。旅行中、生徒会長、副会長のまとめ役、理解ある先生達によって、わすれられない事だらけです。……。」

1972[昭和47]年度の修学旅行は、生徒の実行委員が旅行業者と相談して、同じ予算で広島にまで足を延ばしました。その思い出を鈴木(木村)保夫(定22回)は、『進修百年』に「懐かしき良きあの頃の時代を語る」と題して、次のように書き残しています。

「……。修学旅行では私たち成人組も何人かいましたので、先生方も温かい目でそっと眺めているだけで全部任せてくれました。その当時は修学旅行といえば京都までが普通でしたが、予算もオーバーせずに広島まで足を延ばそうと計画し、実行委員メンバーが観光社と相談をし、ホテルや行動範囲を決めていきました。こういうことはなかなか全日制の皆さんには出来ない、私たち定時制の特権でもありました。思い出は積もるばかりです。今だから明かせる事でしょうが、高校生の修学旅行というものでは部屋の風呂等も使えないものですが、そこは慣れたもので部屋係の女性にチップを渡し、印象を良くすることにより部屋の風呂は使えるし、先生方とはマージャンをしたり、語り明かしたり、楽しい一時の皆の顔が今でも昨日のように思い出されます。……。」

3・4年生の2学年合同での修学旅行が実施されるようになると、4年次には修学旅行がなくなる学年が出てきます。そのため、4年生の思い出に、と自分たちで旅行を計画、実施する学年もありました。定28回河野永二は、『進修百年』に「風呂なしの四年間　一高の思い出」と題して、学年旅行の思い出を次のように語っています。

「……。それから四年生の思い出に自分達ですべて計画して実施した長野県蓼科への二泊三日の旅行が忘れられない思い出です。在校生が減少したため私たちが三年生の時から、三年生と四年生の二学年合同修学旅行になったんです。四年生での修学旅行がなくなったため、それに代わる楽しみ、思い出のために計画したわけですが、自分と石井さんと二人が中心になってまとめました。家内(一年上級生だった真理さん、河野さんが四年生の時に結婚されたとのこと)の兄が交通公社に勤めていましたので、切符の手配をしてもらって、電話でバスの臨時便もチャーターしたりして、民宿に泊まり、ハイキングをしたりしました。夜は酒盛りです。これは定時制の特権ですね。……。」

河野は、1968[昭和43]年に宮城県白石蔵王の中学校を卒業、東京で靴職人をしていましたが、1974年に自衛隊に入隊。本校定時制には1975年4月に入学し、1979[昭和54]年3月に卒業しました。忙しい毎日だったので、定時制に通学した4年間は、登校する前にシャワーを浴びる程度で、しみじみ風呂に入った記憶がないそうです。

長野蓼科旅行（『進修百年』より）

一人ひとりに多くの思い出を残した修学旅行も、昭和50年代後半になると、参加人数の関係から、必ずしも実施されるとは限らない状況となり、生徒数の減少もあって、1991[平成3]年度の信州への修学旅行が最後となりました。

（高21回　松井泰寿）